



Title	参加記
Author(s)	竹村, 寧乃
Citation	スラブ・ユーラシア研究報告集, 5, 194-195 中央ユーラシア研究を拓く: 北海道中央ユーラシア研究会第100回記念. 北海道中央ユーラシア研究会編
Issue Date	2012-11
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/51957
Type	bulletin (other)
Note	北海道中央ユーラシア研究会 第100回記念大会. 第1部. ISBN: 9784938637736
File Information	SEP5_008.pdf



[Instructions for use](#)

北海道中央ユーラシア研究会 第 100 回記念大会 第 1 部

<参加記>

今回の大会は二部構成であり、第 1 部では 4 名の研究者による各 50 分の研究報告が行われた。それぞれ報告 30 分、質疑応答 20 分という限られた時間の中で、活発な議論が交わされた。第 1 部前半の 2 人の報告者は、北海道大学の東洋史研究室に縁ある当研究会草創期の主要メンバーで、フロアの参加者も東洋史関係者が比較的に目立った。一方、後半の二報告はスラブ研究センターの現役院生によるものであり、参加者もセンターの研究員等が多かった。

川口報告は、写本研究の立場からアラビア文字チャガタイ語の歴史書『チンギズ・ナーマ』の二つの写本の紹介を軸に、13 世紀から 16 世紀初頭までを対象時期とするジョチ・ウルス史研究の現状と今後の展望を論じるものであった。質疑応答では、タシュケント写本およびリザエッディン（ファフレッディン）写本を同本異版とみなす根拠、著者特定の根拠、2 つの版の相互関係、書かれた目的や背景、口承的と判断する根拠等、写本自体の性質や評価に関する質問が相次いだ。また、シャイバーン朝あるいはヒヴァ・ハン国といったジョチ・ウルスの系譜をひく王朝・国家がジョチ・ウルスや自分たちのことをどのように表現・認識していたかという点も参加者の関心をひいた。

森本報告は、17 世紀末から 18 世紀初頭に成立したとされる中国河南省のアラビア語碑文について、現地の様子や石碑の写真を交えて紹介し、中国ムスリムのうち慣行の改革に反対する古行派が、その主張の典拠として中央アジアや南アジア由来の権威的文献を主体的に選択して利用していたことを示した。現代中央アジアのイスラーム復興現象においても具体的な儀礼行為に関する論争が存在するという指摘に続いて、フロアからは、建立時期などまず石碑に関する基本的な情報が問われた。碑文の内容については、新行・古行の論争は外から影響を受けて発生したのか、地域を問わず回民全体に共通して生じた現象なのか、儀礼行為が土着化した例や中国的に改変された例はあるのか、儀礼に関するマニュアル本が普及する際の要因は何かといった質問が続いた。また、碑文に「中国」という地名が記されていた点に関心が寄せられたほか、質疑への応答の中で、石碑に併記されている亜文と漢文の間で内容に差異があることも述べられた。

立花報告は、これまでの研究会での具体的なテーマに関する報告をもとに、ポスト・ソヴィエト期の中央ユーラシア政治研究、特にコーカサスのアゼルバイジャン現代政治について、自身の研究テーマの概要を紹介するものであった。質疑応答では、ウクライナ・グルジアを比較対象とする競争の権威主義体制とカザフスタン・ロシア・中東を想定するレンティア国家との両方のモデルをアゼルバイジャンの分析に利用する意義、支配政党の特

徴という観点からみたカザフスタン・ウズベキスタンとの共通性、外交要因に言及しない理由などが問われた。また、コーカサスの政治研究において各国新旧憲法の比較から見えてくるはずの「勝者全取り」というこの地域特有の傾向をどのように捉えるか、あるいは隣国との紛争と政治体制という問題に関して、紛争地奪還に対する政府の姿勢とその紛争当時の状況との関連性をどのように評価するかといった質問もあった。

須田報告は、スターリン期の大テロルがウズベキスタンでどのように現れたのかという点について、現地およびソ連中央の文書館史料を用いて、特に現地エリートの言動に焦点をあてて論じるものであった。フロアからは、縁故主義批判を通して現地のネットワークを破壊することによってウズベク社会を変えようとする意図を政権側がもっていたのか、本報告は大テロルに関する著名な先行研究である O.フレヴニュークの説に対する批判・補強いずれとみなすべきか、新たに用いられた文書館史料は現地指導者の論文等既に公開されている史料の内容と比較し何か新しいことを示すものなのかといった質問が寄せられた。また、共産党指導者と民族知識人のネットワークが地方におけるポリシェヴィズムの定着にとって重要であった 1920 年代から、縁故主義が批判された 1930 年代にかけて、政治エリートたちはどのように変化したのか、といった視点も提示された。

筆者自身、近年の例会で近現代中心の研究に慣れ親しんでいただけに、前半の写本および碑文研究が当初は難解に思えたが、新鮮でもあり、時間的・空間的な広がりのある内容に心惹かれるところがあった。第 2 部でフロアから指摘があった通り、今後、近現代以前を対象とする東洋史研究者による報告が増えること、そして、後半 2 人の報告者のように例会での報告を通して研究者として成長していく院生が今後も続くことを期待したい。

【記：竹村寧乃（北海道大学大学院文学研究科博士後期課程）】